

【巻頭エッセイ①】

読書と学び
—本との出会いを考える—

渡邊 洋子

Reading and Learning ; on the Encounter with Books

WATANABE, Yoko

生涯学習の定義は何か、とよく聞かれる。

生涯学習は領域でなく、考え方であり、アプローチである。一言でいえば「そこから一番遠い人の観点から、そのテーマや学びの魅力や可能性を考える」ことである。ここでは、「読書」という身近な行為を取り上げ、生涯学習的に考えアプローチしてみたい。

一口に読書と言っても、その言葉に触れるだけで表情が輝く人も、身震いする人もいるかもしれない。だが、読書とは究極的には、人が本とどう出会うかであり、そこにルールはない。むしろ「読書」ほど、マイスタイルが楽しめる世界はないのである。自他ともに認める「活字嫌い」をも念頭に置きつつ、本との出会い、著者との出会い、また本を通しての社会・世界との「新たな出会い」について考察する。

1 「本好き」と「読書嫌い」

(1) 本好きな人とは

「本好き」とはどんな人だろうか。第一に、読書好きの人、すなわち、とにかく本を読んでいる時間が「幸せ」と感じられる人が挙げられよう。鞆には必ず1, 2冊の本が入っており、乗り物に乗って時間ができた時には必ず本を手にする。「読書家」、そして「読書家」ほどでないが「とにかく本を読むのが好き」という人も含まれる。

個人で楽しむ場合、出版社が発行する小冊子や読書新聞などから書籍情報を取り入れたり、さらに他の本好きの仲間とともに、読書会や読書サークルなどで同じ本を読んだ感想を交換したりすることも少なくないようである。多くの人はこのように、「読み手」「受け手」として本と向き合っている。

第二に挙げられるのは、本の収集や取り扱いが好きな人である。ここには、コレクター、書誌学者、図書館司書、書店員などが含まれる。コレクターは、本の収集家である。希少本や貴重本などについて専門的な知識をもちつつ、個人として収集を行う。書誌学者とは、作品としての評価に加え、執筆・出版の背景や経緯、初版や再版など発行をめぐる事情、当時の社会・文化的状況、装丁や印刷状態に至るまで、科学的・実証的に研究する人を指す。書誌学者の多くはコレクターでもあるが、コレクターの中には書誌学者顔負けの幅広い知識をもつ人もいる。図書館司書は、「都道府県や市町村の公共図書館等で図書館資料の選択、発注及び受け入れから、分類、目録作成、貸出業務、読書案内などを行う専門的職員」(「図書館法」)で、司書資格が必須の専門職である。

書店員の役割は、人々のより身近なところで本を扱うことであろう。販売だけでなく、日々の仕事の中で幅広い客層からのどんな問合せや相談にも答えられる知識、気軽なレファレンスサービスや読書案内も求められる。2005年12月、直木賞や芥川賞などの文学賞、新潮や角川など出版社による賞に加え、最近では書店員が投票で決定する「本屋大賞」ができた。同賞は、出版業界の厳しい状況を背景に、「商品である本と顧客である読者を最も知る立場にいる書店員が、売れる本を作っていく、出版業界に新しい流れをつくる、しいては出版業界を現場から盛り上げ」るべく発案された。「NPO 法人書店大賞実行委員会」を中心に、全国で「書店店頭でのお祭り」となるフェアを催しており、受賞作の多くはベストセラーやロングセラーで、映画化されるなど書店員の腕が示されている。

（２）本嫌いと活字嫌い

定期的に書店に立ち寄り、ベストセラーは必ずチェックするという「本の虫」がいる一方で、本屋に足を踏み入れたことがほとんどない人も多い。その一部が「読書嫌い」と言われる人たちである。「読書嫌い」を「本嫌い」と「活字嫌い」に分けてみよう。

本好きの反対語は、文字通りには「本嫌い」であろうか。よく「本嫌いの人にお勧めの本」といった読書案内や本のリストを見かける。「本嫌いだった私を変えた一冊の本」といった体験談が語られることもある。その「本嫌い」とはどうやら、まだ本のおもしろさや魅力が十分に味わえていない、または「出会うべき本に、まだ出会えていない」ということのように見える。「本嫌い」をなおす、あるいはなくすには、「よい本と出会う」「よい出会い方をする」ための環境づくりや機会の設定、工夫などが重要な支援になるらしい。

近年、「本離れ」が「本嫌い」に繋がりがやすいとの認識から、新たな読書運動が注目されている。従来の読書運動は、「読書週間」（1947年～）、「子どもの読書週間」（1959年～）などを足場に、読書推進協議会によって進められてきた¹。1980年代に高校教師が始めた「朝の読書」推進運動²は、「全校一斉で行う」「10分間でも毎朝続ける」「読む本は何でもいい（雑誌やマンガはダメ）」、「本を読むこと以外（感想文や記録など）何も求めない」ものであり、生徒と教師と一緒に読書することで「読書本来の楽しみや喜び」「自由や解放感」「精神の散策や心の癒し」「探究心や感性」などを分かち合い、「共に生き、共に学び、共に育み、共に歩む」を目指す点が特徴的と言える。理念がどの程度実現されているかはさておき、学校で特定の時間帯に「本を読ませる」取り組み自体に、賛否両論がある。学校の読書指導が「かえって本嫌いを増やすのではないか」との懸念が出ている。

本来、本を読むという行為は、自由で自発的な知的活動である。「読む自由」を重視する立場からすれば、読書に「指導」や「強制」が入ることにより読書の特性が損なわれ、知的自由が阻害されることが危惧される。身近なところでは、「トットちゃん」（黒柳徹子）が通ったトモエ学園³のような例外を除き、私たちの多くは学校生活で「～しなければならぬ」「～してはならない」などのメッセージが含まれる「指導」を少なからず経験してきた。いかなる活動も学校教育の一環となる以上は、何らかのノルマ感を帯びてくる。本来は魅力ある活動でも「ノルマ」として取り組むうちに半ば「惰性」となり、敢えて魅力を見出したり創造的活動につなげたりしようとは思わなくなる。この流れが身体化され、日常生活に入り込む危険があるために、学校の「読書の時間」に違和感をもつ人が少なくない。

重要なのは、本当の意味で「読まない自由」が保障されない限り、私たちは本当の「読

む自由」を手に入れることができないという点である。「読まされる」(と思う) からこそ、多くの場合、「読む気にならない」のだろう。問題は「読書の時間」の有無ではなく、そこで一人一人の「心から読みたくなる」気持ちと「読まない自由」とがどれほど尊重されているか、ではないか。

もちろん、「読書の時間」は私たちの「読む自由」を奪うものだからなくすべきとの問題提起もあり得る。とはいえ、現代日本の社会や家庭の状況から大局的に考えれば、乱暴な議論だろう。実際、「読書の時間」に読む本を探しに図書館や書店に足を運ぶ子ども、何を読むか悩んで図書館司書や司書教諭、書店員や家族に相談する子ども、友だちの持ってきた本に惹かれたり、「お薦めの本」を教え合ったりする子どもも見かける。少なくとも「読書の時間」が、本と出会う何らかの「きっかけ」となっていることは事実である。ただ、この「きっかけ」とは、本の世界への単なる入り口を指しているに過ぎず、それも「いくつかの入り口のうち一つ」に過ぎないのである。生涯学習社会ではむしろ、学校以外の家庭や地域社会の中に子どもやおとなが多様な本と多様な形で気軽に出会える機会や環境が用意され、読書の可能性がもっと拓かれる必要がある。

「読書の時間」に関わって、ある子どもが母親に「そもそも、なぜ本なんて読まなくてはならないの？」とストレートな疑問を發した。本との出会いを満喫できるような環境整備がない中で「読書＝善」という「隠れたカリキュラム」⁴⁾の息苦しさを、思わず口にしたのだろう。そこでの「本」はおそらく、自分とはさし当たり自分とは関係ない、小難しい内容が並べられたものを意味しよう。ただ、このような子どもに限って漫画本や雑誌、携帯小説などは結構読んでいたりする。自分にとっておもしろいこと、ためになること、刺激やエンパワーメントになることが見出されるからである。

読む対象が何であれ、人が何かを読む行為は、赤ちゃんが成長する中で新しく出会ったものを触ったり、振ってみたり、なめたりかじったりしながら一つ一つのものを確かめ、自分を取り巻く世界を自分のものにしていくプロセスと似ている。アニメや挿絵や写真、活字の数や割合、体裁などにかかわらず、日常的に「知りたい」気持ちを維持する人は、自称「本嫌い」でも環境ときっかけさえあれば、何歳になっても克服が可能である。映画化もされたベルンハルト・シュリンク『朗読者』は、示唆的である。

他方、「活字嫌い」は少し違う側面をもっている。「活字嫌い」とは、媒体は何であれ、「読む」こと自体がおっくうで気が重くなる、文字を読み続けるのが苦痛で、絵や写真、イラストなしでは読めないなど、読んで字の如く、活字や文字が並んでいること自体に抵抗感がある人を指す。活字嫌いには、読書感想文などで本を「読まされた」経験が「苦痛」として身体にインプットされた例が少なくないようである。内容に興味があり、中身を知るためにひたすら無心に「読み取ろう」とする経験では、難しい漢字や言葉がいくつもあってもテーマが難解でも、「読む」こと自体が嫌いになることはない。読書感想文は、本来は「読んだ後の感想」であり、「読む楽しさ」「読む喜び」を味わった後に感動や思いを書き留めておくためのものなのである。が、宿題や課題となると、読む楽しさや喜びを味わう余裕のないままに「書くために取り敢えず読む」行為に変質し、「読む」というノルマは「苦役」とさえなりかねない。

活字嫌いを克服するには、第一に、「読む」＝「苦役」との固定的な先入観や過去の苦痛な読書経験から、何らかの形で「卒業」できるようにすること、第二に、「読む」ことが

もっと身近で気軽に楽しく、「いいこと」や「おいしいこと」をとまなう活動であることを、様々な機会や経験を通して身体で理解できるようにすること、第三に、それらの機会や経験を通し、本や文章の「読み方」についての固定観念をこわすとともに、自分なりの「読み方」や活字との付き合い方を創り出していくことである。

2 本との「出会いを楽しむ」

(1)「読書嫌い」から本との「出会いなおし」へ」

「読書嫌い」は、本と不幸な出会いをしてしまった人とも言えるだろう。

「本」とは時に、自分が楽しいと思う世界に浸らせてくれ、世界を拓げつつ、刺激やパワーを与えてくれる、奥の深い「テーマパーク」なのである。時に、自らの生きる社会の現在と過去・未来、さらに未知の世界に向けて開かれた、だれでもが手に入れられる「どこでもドア」である。また時に、今の自分のありようや立ち位置を違う角度から見せてくれる、等身大の「魔法の鏡」になる。「本」との世界との新たな出会い方、ないし「出会いなおし」の方法を考えてみよう。

一つは、「五感で読む」本との出会い方である。本は「目だけで読む」と考えがちであるが、点字版や点字本などを使って「指で読む」読み方、対面朗読や読み聞かせなど、「耳で読む」読み方、音読や朗読など「目と声で読む」読み方、などがある。「指で読む」本や「耳で読む」活動は、視覚・聴覚障害者の読書の保障として普及しているが、絵本の中には、障がいの有無にかかわらず、五感で楽しむ工夫が駆使された「仕掛け絵本」がみられる。特に、エリック・カールの一連の作品は圧巻と言える。あおむしが色々な食べ物を食べてあけた穴を、読み手が一緒にたどりながらストーリーに参加する『はらべこあおむし』をはじめ、光で視覚に働きかける『さびしがりやのほたる』、同じ視覚でも月に向かって梯子がタテに伸びていく『パパ、お月さまとって』、虫の声による聴覚の刺激がストーリー展開を支える『だんまりこおろぎ』などがある。最近では、「鼻で読む」本には、きむらゆういちによる『おともだちカレー』のように、臭覚を通して読者をストーリーの世界にいざなう本も出てきた。

また音読・朗読は、目で読み取って理解し、心の中で描いていた本の世界を、声に出して読んで新たな角度から捉え・味わいなおし、その楽しみを他の人と共有できる読み方である。マザーグースに始まり源氏物語など文学作品に至る、幅広い作品を耳で味わえる朗読CDも出ている。

二つ目の本との出会い方とは、本に書かれたこと、本の中に描かれたことを、追体験してみることである。例えば、本の内容にまつわる土地やテーマを求めての旅であったり、食事や食文化の実体験であったり、映画化された作品や関連するミュージアムの訪問によるバーチャルな体験であったりする。

三つ目の本との出会い方は、従来にない読書環境や最新のメディアを通しての新たな本との出会い方である。ユニークな図書館や書店で本との新鮮な出会いを模索したり、図書館や書店に附設されたカフェや街中のブックカフェなどでゆったりとした読書を楽しんだり、紙媒体の本でなく電子書籍やスマートフォン・携帯電話などの新しい機器を使って読書を楽しむことなどを含む。

(2) 背表紙読書のすすめ

読書とは一般に、読む本を決めたら、最初の 1 ページ目から最後の 1 ページまでのすべての文字をきちんと読み通すものと見なされる。読み始めた本は、予想外に難解な本でも、あまりおもしろくなくても、途中で放り出さないで最後まで読むことを、暗黙のうちに期待される。気になる本が複数冊あっても、まずは順番に読むことを期待され、複数を同時並行で読むのはあまり推奨されない。私たちは無意識に「本はこう読むべきもの」というスタイルを念頭に置いて本を選び、読んでいるようである。ただ、限られた領域の限られた範囲の少数の本を深く読むと、必然的に他の領域にまで手が回らない。必然的に、他領域の本には無関心にならざるを得なくなる。図書館や書店に行っても、自分に関わる本とない本がはっきりと分かれるため、「関わりのない本」は「この世に存在しない」と同じことになる。

ここで敢えて「背表紙読書」を提案したい。「背表紙読書」とは、図書館や書店で、最初から領域やコーナーを限定せず、広範囲で多くの本の背表紙を読むという読書法である。一見自分の関心とは直接にかかわらない領域も含めた広範な本のコーナーで、背表紙に書かれたタイトルやサブタイトルを読みながら、自分の関心を絞ったり広げたりしていく、という「本の読み方」を指す。気になるテーマやタイトルの本を見つけることが一つの目的であるが、重要なのは「私の一冊」を早く決めることではない。むしろ、広範な領域で、背表紙が示す多様な本のテーマやタイトルと触れる中で、自分の興味関心の幅や境界線を広げ、自分の本の世界やレパートリーを拡大していくという、出会いのプロセスである。

この方法は、自分の興味の所在がわからない場合、問題関心が漠然としている場合、問題関心が狭すぎて多面的なものの見方ができていない場合などに、特に有効である。「関心が絞りきれない」「あるテーマに関心があるが本が見つからない」という人は、限られた範囲の本しか見ていないことが多い。無関係と思っていたコーナーに気になる本があったり、思っていたのとは別のキーワードが重要とわかったり、背表紙読書では色々な発見や気づきがあり、読書の幅は無意識のうちに広がってくる。

もちろん背表紙だけでなく、本の中身を見ても構わない。気になる本は手にとり、「はじめに」「おわりに」と目次だけ読む。「はじめに」「まえがき」は著者がなぜ何を考えて書いたのか、すなわち執筆の意図や本の趣旨がわかる。「おわりに」「あとがき」は通常、意図がどこまで達成されたか、どんな意味があったかが書かれている。目次は、「はじめに」と「おわりに」の間で、本論がどう展開されたかを知るのに便利である。また著者の経歴や背景から、どんな人がどんな立場で書いた本かがわかるだろう。これを繰り返す中で自分にとって有効な本をリストアップし、優先順位を決めるのである。背表紙読書は、卒業論文・修士論文を書こうとしている学生・院生などにも勧めている。

(3) 本をリソースとして活用する ―ノールズ『自己主導型学習』

成人教育学の領域でも、大変類似した方法がおとなの能動的な学び方に向けた演習の一つとして提案されている。例えば、成人教育学者マルカム・ノールズは、1975 年に『学習者と教育者のための自己主導型学習ガイドーともに創る学びのすすめ』(明石書店、2005 年。原文は *Self-Directed Learning: A Guide for Learners and Teachers*) という実践的なハンドブックを刊行した。

同書では、おとなの学習者が、知識を「伝達されるだけの人」から一歩踏み出すことの

必要性が説かれた後、学ぶのに適したアットホームな雰囲気の中で、お互いに自分がどんな学習ニーズをもっているのかに気づき、自らの学びをデザインできる学習者に成長できるようにしていくプロセスが、演習とともに示される。おとなに教える人には、「学習内容を伝えるだけ」の役割から「学習が促進されるよう援助する」役割への転換の必要性が強調され、援助のしかたが授業の流れとともに具体的に提示されている。

特に注目されるのは「本をリソースとして活用する演習」である。リソースとは、学ぶ手だてや手がかりのことであり、能動的な学びの手だてや手がかりとして、本をどう活用するかを学ぶ演習である。

学習者は各々、「表紙と目次と索引があつてたくさんの情報を含む本」を持参する。説明を聞いた後、持参した本を他の学習者と交換する。この初めて出会う本を使って次のように進められる。

①本の前半部分で、本書が目指すことを確認する。②本の後半部分で、著者についての説明と本書出版の経緯に関わつての説明を確認する。③著者や編者の「まえがき」を読む。④目次をみて、著者や編者が、章や節、その他の区切り方を使って内容にかかわる情報をどう整理しているか、確認する。知りたくなってきたことを「問い」の形にして三つ書き出す。⑤本を閉じ、第一の「問い」について目次にありそうなキーワードや言い回しを想定してみる。⑥実際に目次をみて、⑤で挙げた言葉や類義語の有無を確認し、「問い」に応えるページを調べる。⑦「問い」を扱う箇所と関連するページすべてに目を通し、「問い」に関わる情報をすべて入手する。⑧あと二つの「問い」についても、同様の手順で取り組む⁵。

①～⑧の後、日常的な情報収集と本演習を比べて、入手した情報の質に違いがあるかどうか、振り返って考えてみてほしい。本との付き合い方に新たなレパートリーが加わり、「他人事」と思っていた自己主導型学習が少しずつ、身近なものになってくるであろう。読書の世界が広がっていく中で、意外なところから「私の一冊」に出会うことができるかもしれない。

3 「本との出会い」から「新しい出会い」を経験する

(1) 著者との対話

「本を読む」ことは、著者と「対話する」ことである。

「活字信仰」の言葉のように、印刷された活字を読んでいるとふと、この文章が人の手によって書かれたことを忘れることがある。実際には、生身の著者があちら側にいて、読者の私たちの存在を意識しながらメッセージとして目の前の本や文章を書いたわけである。著者の思いや喜びや苦悩などが反映されているに違いないし、著者の弱みや齟齬、作為が認められることもあるだろう。

小中高校の国語の授業では、著者の内面に留意しながら文章を読む力をつけるために、様々な取り組みや工夫がなされてきた。「著者の意図は…」 「筆者の気持ちになって…」 などの問いかけに応えながら読みを進めるトレーニングは、国語好きを育てた一方、国語が「不得意で嫌い」な人たちを少なからず生み出し、大きな格差が生まれた。経験的に言え

ば、国語嫌いとは本嫌い・活字嫌いとは一致することが多いが、国語好きな人が本好きな人と一致するとは限らない。与えられた作品を「正確に」読める力は必ずしも、作品の魅力を堪能できる力と一致しないためであろう。

魅力的な小説や人気あるエッセイなどを除き、私たちが「活字」の世界を「味気ない」と思ってしまいがちなのは、生きた人間の息づかいや「人間らしさ」が感じられない、すなわち読書の中で「人との出会い」が感じられないからである。生涯を通じて本と親しみ、人生をゆたかにするリソースとして本を活用するには、土台としての「読み」を楽しむ能力の育成や機会づくりが求められる。

「読み」を楽しむ方法の一つは、どんな本にしても、著者の表情を確かめながら読んでいるつもりになり、1 文ずつじっくりと味わって読んでみることだろう。「なるほど、その通り」「言われてみれば、確かにそうかも」「でも、何かしっくりこない」など、1 文ごとに相槌を打ちながら読み進めていくのだ。少し難しい文章の場合には、1 文ごとに鉛筆で○△×などを薄く書き込みながら読んでみるのも一案である。しばらく読み進めていくうちに、著者と自分がテーブルを挟んで、実際にコーヒーを片手に、向かい合って話しているような気がしてくれば、我が意を得たりと言える。

(2) 社会を読む — 内田義彦『読書と社会科学』

「室内にいて一人でするもの」とのイメージの強い読書を、社会と関わる営みと捉える発想には、違和感をもつ人もいるかもしれない。本を読むことは「社会を読む」ことであり、本が読めることは「社会が読めること」だとする読書観がある。経済学・社会思想史研究者の内田義彦は『社会認識のあゆみ』(岩波新書 1971) の中で、私たちが「本が読めなくなっている」のは、社会が見えなくなっていることと同じ要因によるものだと言っている。

同じく内田の『読書と社会科学』(同前、1985) は、彼が読書会に講師として呼ばれた際の講演内容を口語体で採録したもので、「情報として読む」「古典として読む」の二通りの本の読み方が挙げられている。「情報として読む」は、私たちが日常的に経験することの多い、情報を得るための読み方である。内田は、「情報として読む」場合の例として新聞を挙げよう。新聞は「読者に必要な新しい外部情報を迅速正確にとどけることを第一の任務とし、それに適当な文体をえらんで書かれて」いる。それゆえ、一読明解で重要な点が認識できること、だれが読んでもどんな読み方をしても「同じに読める」という情報の一義性を特徴とする。「電車のなかで立ち読みしても、書斎でじっくり腰を据えて読んでも」、重要なことが同じように理解でき、また、「ぼやっとしていても、心ここに在らずとも」「見る人の眼に向うから飛び込んできてそのままちゃんと理解でき」る書き方が目指されているわけである。

他方、「古典として読む」とは、一読明解ではなく、読む度に、読み取る内容や何が重要かという見解が変わるような読み方である。「むしろ、一年後に読んで、あの時はこう読んだけれど浅はかだった、本当はこう書いてあったんだなあという風にして読めてくる」といった読み方と言える。この読み方の特徴は、読み手である自分の成長とともに、同じ文章や本の読み方が変わってくる点である。ここでいう古典とは、何度読んでもその度ごとに新たな発見があるような内実をそなえた本だとされる。

「私の古典」と言える本と出会い、何度も読み返しながら新たな自分に出会い、異なる

視点や見解を獲得していけるようになることが「古典を読む」、より深く「本を読むこと」の醍醐味とも言えよう。

（３）世界を読み取る ― フレイレ『被抑圧者の教育学』

直接に読書を指すわけではないが、前掲のフレイレは、おとなの文字の読み書きができない人びとにとつての文字の獲得が、「世界を読み取る」視点の獲得にもつながり得ることを実践的に示した。南米のカトリック神父であつた彼の識字教育実践は、貧困と抑圧の中で「沈黙の文化」への埋没を余儀なくされた人びとが、「文化サークル」というグループ活動での「対話」による識字学習を通し、文字の読み書きとともに、自らが生きる世界を「読み取る」、すなわち自らの状況や世界を客観視する力をつけ、受け身の人生から読み取った世界に能動的に関われるようになることを目指した。

もちろん、時代状況も国や文化も異なるが、「本を読むこと」自体が、文字という手立てを通して自らが生きる世界を「読み取り」、そこに積極的に関わる糸口を見つける営みでもあることを、示唆してくれるものである。

４ 「読書と学び」のかたち ―読書論に学ぶ

いわゆる読書論は、本を読むためのナビゲーターと言える。『読書と社会科学』に加え、戦前・戦後の多くの著作、特に読書をタイトルとした戦後のものに限っても、小泉信三『読書論』（岩波新書、1964）、三木清『読書と人生』（新潮文庫、1974）、ショーペンハウエル『読書について 他２編』（岩波文庫、1983）など、それ自体が「古典」ともいえる多くのすぐれた読書論が、著者自身が古典的名著から何をどう読み取ったかについて独自の「読み」を鮮やかに見せてくれる。古典的名著と長年呼ばれてきた作品を「古典としての読み方」でどう読み解くのかを、まさに眼の前で示してくれるのである。

最近では「本をどう読むか」についてノウハウや技術を実践的に示す本も多く出ている。すべて読書論の範疇に加えてよいかわからないが、新書や文書のコーナーでも、一周する間に数冊と出会う。おもしろいのは、読書や本についての多様で斬新なアプローチや知見が展開されている点である。ここにそのうちの２冊の本がある。本を速くたくさん読むことを勧め、速読のわざを伝授する「速読術」と、逆にゆっくりじっくり読むことの効用を説く「遅読のすすめ」の２冊である。各々の提起する読書のしかたには各々独自の読書観や論理があり、いずれも独自の魅力や説得力がある。

まず、「速読術」の斎藤孝は、現代社会で本を速く読む能力を「本好きかどうかに関係なく、雑誌や新聞、書類などの『速読』を広く一般的な能力」と捉え、「速読」が仕事や生活のあらゆる場面で必要とされ、同時に「バランスのとれた価値判断能力を養う上で、多くの本を読むことが欠かせない」「多読が価値観の“偏食”を直してくれる」と強調する。「２割読書法」「だれでも今すぐできる速読術」「速読上級者用プログラム」「速読を生活にうまく組み込んでいく方法」などのユニークで大胆な提案は、すぐに試してみたいくなるものである。

他方、「ゆっくり読んでいると、一年にほんの一度や二度でも、ふと陶然とした思いがふくらんでくることがある」と独自の「遅読法」を提唱する山村修は、通読を基本とみなし、速読法の「飛ばし読み」や「拾い読み」を読書から除外している。「読了のよろこび」

こそが「読書のよろこびのうちもっとも大切なものの一つ」と捉えるためである。「速読派」のテクニックを、「いままでに、ただの一度も、本を速く読んでよかったことはない」と「速読派」のテクニックを批判的に紹介する山村は、自分の読書経験から遅読の効用や味わいを丁寧に説いており、思わず奥深い世界に引き込まれる。

また今野雅方は文章訓練の基礎として「深く『読む』」技術を説き、「読む」「書く」「考える」の三者を結合する実践の手引きを示し、高田明典は読書を「知識や思想を、自分の内部に取り込むという能動的な営み」として「難解本」との本格的な対峙・格闘の技術を指南する。さらに、情報革命や電子書籍、「大量発話時代」など新たな時代の潮流の中で「本は、これからどうなっていくのか」を問う論集や特定のジャンルの本の読み方の提起・指南など一見対立・矛盾する要素が入った本もあるので、読み比べると「本の読み方」のマイスタイルの形成に役立つであろう。

むすびに代えて

本稿では、生涯学習という観点から、本好きのみならず、多くの活字嫌いの人をも対象に「本」との様々な出会い方を考えた。「読書とは何か」から出発し、「本」や「本を読むこと」が私たちに拓き導いてくれる世界、「気づき」や認識・価値観の変容を含め、本を手がかりに多様に「学ぶ」可能性について検討してみた。読書を通じてさらに学びの世界に踏み出すには、「読む」と「書く」をつなげる「読書ノート」の活用、「読む」を「話す」「聴く」「話し合う」につなげる読書会への参加なども有効だろう。

本との出会いは、活版印刷が生まれる前、一冊ずつカリグラフィーで制作された大型本のような「モノ」として出会いを含め、その 1 ページ 1 ページから時間や空間、世代を超えた人と人とのダイナミックな関係性を生み出していく。ICT 時代にデジタル化されても、この未知の可能性を秘めた不思議な知の宝箱が、読者を、過去と現在、現在と未来を縦横無尽に往来するタイムトラベルへと誘うのである。

主要参考文献：

- 池澤夏樹編『本は、これから』岩波新書、2010。
- 内田義彦『読書と社会科学』岩波新書、1985。
- エリック・カール『はらぺこあおむし』、偕成社、1989 年、同『パパ、お月さまとって』、同、1996 年、同『だんまりこおろぎ』、同、1997 年。同『さびしがりやのほたる』、同、1998 年。
- きむらゆういち『おともだちカラー』（江川智穂（絵））世界文化社、2012 年。
- 黒柳徹子『窓際のトットちゃん』、講談社文庫、1984 年。
- 今野雅方『深く「読む」技術—思考を鍛える文章教室』ちくま文庫、筑摩書房、2010。
- 斎藤孝『斎藤孝の速読術—これで頭がグングンよくなる！』ちくま文庫、筑摩書房、2010（2006）。
- ベルンハルト・シュリンク『朗読者』、新潮文庫、2003 年
- 高田明典『難解な本を読む技術』光文社新書、2009。
- マルカム・ノールズ（渡邊洋子監訳・京都大学 SDL 研究会訳）『学習者と教育者のための自己主導型学習ガイド—ともに創る学びのすすめ』、明石書店、2005。
- 平野啓一郎『小説の読み方』PHP 新書、2009。

パウロ・フレイレ（小沢有作ほか訳）『被抑圧者の教育学』、亜紀書房、1979。

山村修『増補 遅読のすすめ』ちくま文庫、筑摩書房、2011。

¹ 社団法人読書推進協議会 HP：<http://www.dokusyo.or.jp/>、2016年11月23日最終参照。

² 同運動は、2012年7月末に27,000余りの小中高校で実施されている。大塚笑子「朝の読書」メッセージ HP：http://www1.e-hon.ne.jp/content/k_46_3.html、2016年11月23日最終参照。

³ 黒柳徹子『窓際のトットちゃん』、講談社文庫、1984年。

⁴ 学校の正規のカリキュラムの外で、暗黙の前提や価値観が学校生活に大きな影響を与えているというメカニズムのこと。

⁵ 「リソース L 本を能動的に読むための演習」マルカム・ノールズ『学習者と教育者のための自己主導型学習ガイドーともに創る学びのすすめ』、渡邊洋子監訳、京都大学 SDL 研究会訳、明石書店、2005、pp.126 - 128 をもとに構成。